

日本型放牧の今日的意義
- 食文化から環境問題まで -

生源寺真一

1. 農耕景観と食文化

1) ヨーロッパの農耕景観を代表するのは草を食んでいる牛や羊。日本にあってヨーロッパにない農耕景観は稲をはぐくむ水。地域に特有の農耕景観と地域の食文化はほんらいワンセット。

2) 所得水準の上昇とともに戦後の日本に生じた食生活の大きな変化（附表参照）。畜産物の摂取量の顕著な増加と米の消費の減少。伝統的な食生活に新しい食材や調理法のミックスした日本型食生活。近年では脂質の過剰摂取やカルシウムの摂取不足といった点で、国民の食生活にも注意信号。

3) 気になる変化した食生活と今日の農耕景観のギャップ。食生活を素直に映し出した農耕景観への移行が自然。逆に、風土にあった生活という観点に立った食の見直しという発想も重要。農業の姿と食生活の姿がふたたび接近するなかから生まれる次代の食文化。

2. 農業技術の B・M・E

1) 農業技術のふたつの側面。生物学的（Biological）な側面における技術進歩を代表する品種改良。工学的（Mechanical）な側面における技術進歩を代表する田植機の発明。前者は食料不足・土地不足の社会環境に威力を発揮。後者は労働不足・高賃金の経済で威力を発揮。

2) 不足する要素を節約し、豊富な要素を充分利活用することが、農業技術に対する社会の基本的な要請。急速に劣化が進んでいる地球環境。稀少化する環境要素を大切の保全し、可能な限り修復することが求められるこれからの農業。B技術・M技術重視の時代から E（Ecological）技術重視の時代へ。

3) 環境保全型農業促進の方向への政策転換を鮮明に打ち出した食料・農業・農村政策審議会企画部会「中間論点整理」(2004年8月10日)。

【「中間論点整理」より】

農業の自然循環機能を適切に発揮させることを通じ、循環型社会への転換に貢献するため、食料・農業・農村に関する政策についても環境保全を重視した体系とする必要がある。

環境と調和のとれた農業生産活動の確保を図るため、農業者が最低限取り組むべき規範を策定し、各種支援策を実施する際の要件として、農業者にこの規範の実践を求めるとともに、環境保全への取組が特に強く要請されている地域において、農業生産活動に伴う環境への負荷の大幅な低減を図るためのモデル的な取組に対する支援を導入する方向で施策の具体化を図る必要がある。

3. 条件不利地域と国土の有効利用

1) 条件不利地域を対象としての的確な農業政策をデザインするためには、条件不利地域のタイプ分けが不可欠。機械化に不適な工学的なハンディキャップと栽培条件に恵まれない生物学的なハンディキャップ。

条件不利地域の類型区分

	兼業アクセス良好	兼業アクセス不利
生産条件良好	条件良好地域	該当地域なし
工学的条件不利	タイプ1	タイプ3
生物学的条件不利	該当地域なし	タイプ2

2) 集落協定を重視した中山間地域等直接支払制度はタイプ1の水田農業に適した施策。圃場と圃場、農家と農家が互いに支え合う水田中心の中山間農業にマッチした施策。他方で、米の供給力の過剰状態を考えるならば、土地利用の思い切った転換を視野に入れることも重要。

3) タイプ1やタイプ3の土地利用にも新たな可能性をもたらす放牧型畜産。工学的なハンディキャップを生態学的に克服することを目指す山地畜産。

【生源寺眞一『農政大改革』より】

山地畜産とは、山間部や傾斜地といった不利な条件にねばり強く向き合い、自然資源の内在力と動物の行動特性をたくみに生かしながら、環境の保全と本物の食品を目指す先駆的な農業実践をいう。

4. 社会とともに歩む日本型放牧

1) 食の安全・安心をめぐる一連の事故・事件は、食と農の距離を短縮する契機としても作用。人間の健康とともに農業の生産環境の健康にも関心を寄せはじめた消費者。農業を環境に優しい産業として評価する国民の「常識」に翳りが生じるのは時間の問題。

2) 政策の後押しによる環境保全型畜産への接近と同時に、消費者の力によって引き出される環境保全型畜産という視点が大切。例えば、優れた畜産の循環度指標に関する情報提供は環境保全型畜産のバックアップにも有効。

3) 真の環境保全型畜産を支えるのは、孫子の時代を見据えることのできる長期の時間的視野。農村の心ある人々のあいだに脈々と生きているコモンズ精神。将来の世代に向けられる肉親としてのまなざし。

4) 家畜のいる農耕景観。人が動物と触れ合う機会の重要性。生産物加工のバリエーションの広い畜産。これらは日本型放牧をグリーンツーリズムに活用するさいのポイント。

【生源寺眞一『新しい米政策と農業・農村ビジョン』より】

こんなふうに述べたことがある。「アメリカやオーストラリアといった新しく開発された国々においては、自然資源が豊富であることもあって、自然の産業的利用の空間、言い換えれば農場と、国民のアクセスの対象としての自然空間、典型的には国立公園は、概して分離されて存在している」。もう少し拙文からの引用を続けさせていただくと、「自然の産業的利用の空間と、アクセス可能な自然空間、さらには居住環

境としての空間、これらのディメンションがオーバーラップして存在している点に、日欧の農村に共通する基本的な特質がある。」

【附表】食料消費量の変化（1人当たり年間供給量 キログラム）

	1960年	1990年	2000年	00年/60年
穀類	149.6	103.5	98.5	0.66
うち米	114.9	70.0	64.6	0.56
うち小麦	25.8	31.7	32.6	1.26
いも類	30.5	20.6	21.1	0.69
でんぷん	6.5	15.9	17.4	2.68
豆類	10.1	9.3	9.0	0.89
野菜	99.7	107.2	101.5	1.02
果実	22.3	37.4	44.1	1.98
肉類	5.2	26.0	28.8	5.54
鶏卵	6.3	16.5	17.0	2.70
牛乳・乳製品	22.2	83.2	94.2	4.24
魚介類	27.8	37.1	37.2	1.34
砂糖類	15.1	21.8	20.2	1.34
油脂類	4.3	14.2	15.1	3.51

資料：農林水産省「食料需給表」による。